日本語

孫驃炅

「日本語は難しくて複雑な言語だ」と日本語を学ぶ人たちの声をよく聞く。実に、日本語は、日本語を構成する様々な要素によって、他の言語と比較して独特で繊細な言語である。自分は次の3つの視点、「表記体系」、「文の仕組み」、「社会構造から生まれた日本語」に絞って日本語の特徴と精密性を説明したいと思う。

まず、表記体系について、「ウサイン・ボルトは、２００９年に１００ｍを９秒５８で走った。」の文から見られるように、日本語の特徴は、中国から伝わった「漢字」、漢字から独自に作り出した「ひらがな」と「カタカナ」、ラテン文字を使った「ローマ字」、「アラビア数字」の五種類の文字を組み合わせて使っていることである。世界の文字は大きく表音文字と表意文字に分けられ、多くの国は表音文字のみ（英語、スペイン語など）、あるいは表意文字のみ（中国語）を使用しているのに対し、日本語は、前記の例でもわかるように表意文字である漢字と表音文字であるひらがな、カタカナ、ローマ字の両方を使っている。その上、漢字の音を使った漢語と日本独自の言葉、和語があり、読み方にも音読みと訓読みがある。

漢語：「火事」（かじ）、「大根」（だいこん）

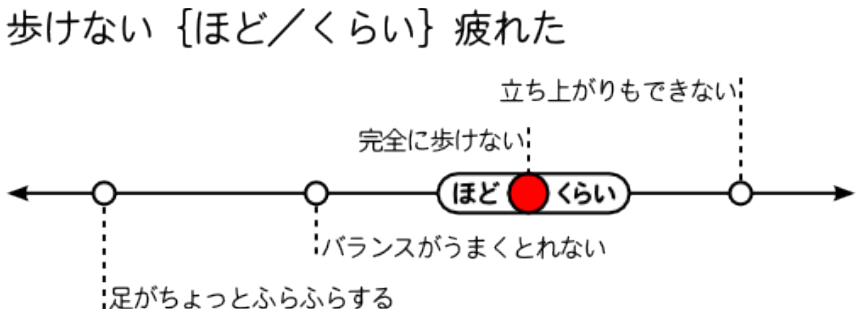
和語：「山」（やま）、「川」（かわ）

さらには、音韻が少ないため、同じ音で意味が全く違う同音異義語が多く、音の高さで区別している。例えば、「橋」（低→高）と「箸」（高→低）、「雨」（高→低）と「飴」（低→高）がある。また、音の長さによっても意味が変わる。例えば、「kōban」（交番）と「koban」（小判）などがある。

次に、日本語の文の仕組みについて、世界には英語のように文の構造において、S（主語）V（動詞）O（目的語）の語順をとっている国が多いが、日本語はSOVの文の構造をとっている。そして、主語や動詞を省略することもある。例えば、「今日は、どちらへ。」（主語の「あなたは」と「行く」の動詞が省略）、「横浜まで。」（主語の「私」と「行く」の動詞が省略）のように。

また、日本語の助詞は合計188個あり、自立語の後ろに添えて、文中で語と語の関係を表す役割をしている。例えば、英語で、「A crab eats a worm」という文があるとする。訳すと「蟹は虫を食べる」となり、「蟹は」は主語、「虫を」は目的語となる。自立語＋助詞の語順を変えても「虫を蟹が食べる」、意味は同じになる。これらは英語圏では見られない特徴である。

また、文章で助詞を適切に使いこなすによって微妙な感覚の違いを表現する。「くらい」と「ほど」の助詞は、2つの対象を比較するのに使用されるが、意味には違いがある。次の図を見てみよう。



「ほど」と「くらい」は両方、赤い点での疲れを示す。しかし「ほど」は、疲労が赤い点以前の状態を示し、「くらい」は、疲労が歩けない状態を超えたという事実を強調している。また、誇張する際には「ほど」を使用し、「くらい」は適切ではない。

死ぬほど寒い（寒いけど、本当には死なない）

死ぬぐらい寒い（本当に凍死する程度の寒さ）

これらの助詞の微妙なニュアンスの違いは、日本人には容易に理解できる。このように助詞が言葉の役割を決める言語は、韓国語と日本語以外に存在しない。

最後に、日本語は日本の社会構造が大いに反映されている言語であるということを述べたい。“和”を重んじる集団主義の日本には直接的な表現を避ける、丁寧な言い方がある。「よろしくお願いします」、「恐れ入ります」、「お疲れ様です」などの表現は、欧米圏の言語に直訳するとおかしな意味になる。他にも「空気を読む」、「懐かしい」など、実生活の中で覚えていかないと理解することが難しい表現が多々ある。

もう一つ、日本語には敬語がある。人に対して敬意を表す言葉はどの国にも存在し、社会生活をする上で必要な言葉である。しかし、日本を含めアジアのいくつかの国の敬語は文法体形で使い分けられているところが特徴的である。英語では “please”を文末に付ければすべて丁寧になるのに対し、日本語は、例えば、接頭語「お」や「御」を添えたり、接尾後に「様」や「殿」を付けたり、助動詞「行かれる」や「行きます」、「言う」→「おっしゃる」などがある。そして、話し手の意識の方向によって尊敬語、謙譲語、丁寧語に分かれる。「食べる」という言葉をとっても、日本語では「召し上がる」、「おあがりになる」などは尊敬語、「いただく」、「頂戴する」は謙譲語、そして「食べます」、「いただきます」などは丁寧語などで表現する。一方、英語では、「eat」、1つの単語しか存在しない。このような敬語は、日本では組織内の上下関係がとても重視されるため、自分が置かれている社会的な位置によって、たとえ相手が年下であっても、うまく使いわけ、相手との良い関係を維持していかなければならない。

文字がなかった時代からわずか1200年あまりで漢字から、今使っている日本語まで進化させたことは驚きであり、人口1億人以上もの人がこの言語を母語として使っている。すべての言語がそれぞれ異色で特殊だという意見もあるが、表記、文法、社会構造の視点から見ても、日本語は他の言語には存在しない性質をもっている。言語学的にも日本語は、他の語族に属さなく、日本語族とした独立した語族に分類されることからもその特殊性が

うかがえる。また、日本語では表記や発音の細かい違いによって、意味に大きな差が生じる。このような点を考慮して見たとき、日本語は実に精密で、独特な言語である。